

欧米の教育と日本の教育

——— 日本教育の反省点 ———

国立教育研究所長 平 塚 益 徳

—

欧米の教育と一口にいても、民族、歴史、宗教、政治、経済の面での違いから、それぞれ異なった特色ある教育をくりひろげているが、しかもその間に、いくつかの共通的な面をもっている。

第一は教育というものをただ単に学校教育とだけ考えて家庭、一般社会がまた、教育に対してそれぞれ重要な役割を果たすべきだと確信されている点である。忘れてならないことは、家庭では、人生に対する基本的な構えといったことが、自然のうちに愛情を中心に子供たちの身につくような工夫がめくらされていることで、日本のそれと比較した場合欧米のそれは一般に社会性が家庭教育の初めから強くおし出されているのである。

例えば、イギリスの家庭で、一番最初に教えられる言葉は、「どうぞ／＼」と「有難とう」という二つの挨拶である。これらの言葉は、子供たちに対し、ただ“欲しがり”，駄々をこねてそれを獲得するといったことを絶対に許さずに、欲しいものについては、何らかの節度のうちにそれを求めさせて、そして求めたものが与えられた場合、まず第一に感謝の念を公にすることをしつけることにほかならない。

またドイツでは「幼少時代に、自己の欲求を抑制することを教わらなかった人は一生不幸だ」という有名なカントの言葉を深く味わいかみしめて、その意味での「幸福な一生」のよきスタートを、まず家庭生活を通じて体験させているのである。注目すべきことにドイツでは、中等学校までのあらゆる学校の授業は午前中で終わってしまう。どのように遅れても、午後一時半過ぎには学科の授業は原則として行なわれないのである。それは何故であるか。その理由は、この国の長い伝統的な考え方の一つとして、学校教育は知的教科を受ける場所であって、それ以外の道徳的、情操的な教育は各家庭で行なうべきだ。という分担が定められているからである。もちろん各学校内で、道徳的、さらに情操的教育が行なわれていないというのではない。ただ重点的には、学校は知的分野を目指し、家庭はモラル、情操面の陶冶の場所であると考えられているのである。この点で「モラルは母の膝の上で、お乳と共に吸い込まれるものだ」という諺がドイツで生み出されているのは怪しむに足りない。

特にこの国の婦人の三大理想の一つが「子供を大切にすること」であり、その大切にすることの内容としては、決して甘やかすことでなく、むしろ厳しく社会性をしつけることにあることは、大いに範とされてよい。現にドイツでは、子供を溺愛する母親を軽蔑して「動物的な母」と呼ぶことは注目されるべきである。

二

この点フランスでは若干ニュアンスを異にしている。1962年度において、この国では早くも2才児で10.6%、3才児37.7%、4才児で実に64.5%といった高率の幼児たちが、公私立の特設機関で、規則的な教育を受けているのである。ただしこの場合忘れてならないことは、家族側がその子供たちに対する教育の義務を放棄してしまっていると考えるのは早計である点である。むしろこれは、この国の知的、技術的教育に対する深い関心が、特設、専門機関への信頼度を高め、むしろそうした機関と家庭との協同体制のうちに、望ましい幼時期の教育が展開されることを期待しているとみるべきであろう。現にフランスの一大特色として、公立学校が日曜日以外の1日（木曜日）を完全に休暇という制度を1682年以来今日に至るまで持続していることは、家庭側が、道德教育を学校だけに委ねないというよき伝統の現われというべきであろう。この木曜日こそは、心ある家庭がその子弟を教会に送り、宗教的な指導、訓練をそこで受けさせているのである。

三

以上、英、独、仏3カ国に共通的に見出される家庭教育の重視の特色は、アメリカにおいても亦例外ではない。特にこの国では、社会悪に対する善良な家庭による教育的な戦いは甚だ活発であった。その中心的スローガンは「他人のために」という句で代表されている。アメリカでは、幼少時代に、「受けるよりも与えることが幸福である」とのバイブルの教えにもとづく善行がしつけられ、クリスマス、誕生日をはじめ、いろいろな機会を通じて、肉親、知友からはじめて、公共施設に対してすら、喜んでものをプレゼントし、進んで寄附をするよき習慣をうえつけられているのである。

さらにアメリカの教育から学ぶべき家庭教育の特色は、小動物を可愛がるよい気風が養われていることである。もちろんこのことは、アメリカに限らず、ヨーロッパ各国に共通して見出される特色であるが、アメリカでは特にこの面の教育が徹底している。こうした幼少時代からのヒューマニズムにもとづく教育は、やがてこの国をして、特殊児童に対する教育を世界一熱心ならしめているのである。アメリカにおける特殊教育が世界一の水準に達しているのは、決してこの国が経済的に恵まれているからではなく、第一義的には、家庭教育の重要な柱として、人にもものをささげる教育、小さな動物を大事にする教育等を柱にしたヒューマニズムの教育が確立されているからに他ならないのである。

四

欧米の教育と日本の教育との著しい対比の第二の点は、社会教育の彼我における比重の差である。

第一、イギリスでは周知のように、社会教育は普通継続教育と呼ばれ、フランスでは永久教育、アメリカでは成人教育と呼ばれている。それぞれ、特色のある呼称というべきであるが、われわれは、英、仏両国の呼び方のうちに、教育そのものの本質を見抜いた叡智のひらめきを見出さずにはおかれぬ。すなわち継続といひ永久と称することは、もとより家庭教育、学校教育の重要性を十分ふまえた上で、結局、人間

教育が一生の問題であり、永久の努力であるとの認識と覚悟のほどを示していると観ぜざるを得ないからである。

さらに重要なことは、人間が真に価値ある生活、意義深い一生を送りうるために、最も肝要なことは、必ずしも、上級学校にぜひ進学しなければならないといった考えがなく、人それぞれ固有の適性、能力に真に適応した家校教育を受けることこそ真に幸福な生活を約束することである。結局学校教育の本質は程度の差こそあれ、基礎的、一般的のもので、特に文明の進歩のめまぐるしい現代においては、学校卒業後何らかの「継続的」「永久的」教育を常に受けていなければ健全な社会人の一員たり得ないとの認識が一般に徹底しているのである。

われわれの確認しうることは、わが国の学校教育の水準は、たしかに現在世界最高である。しかもそれは、歴史的にいっても然りである。この点はあくまで先人の努力の尊い賜物として、感謝し敬意を表すべきであるが、社会教育のこととなると、われわれは決して安心してはいられないのである。最近、喜ばしい現象の一つとして、この面の努力が若干積み重ねられつつあるが、決して現状は満足しうる段階に到達していない。われわれの観るところ、この面の徹底的振興なしには、日本の教育は決して真に世界的といえないのである。

五

ところで、大いに自戒すべきことは、わが国の教育の長所というべき学校教育自身も、その内容を慎重に吟味、反省する場合、決して世界第一流と誇称し得ないのである。なるほど量的には、日本の高等、中等、初等教育の各段階におけるわが国の教育は一応他を圧している。然しながらそれらは、日本の教育を久しく蝕んでいる形式主義に毒されて、真に実りある教育の実績をあげ得ないでいるのである。現在新制高校の在学中、果して何パーセントの生徒が真にその課程を完全に履習し終えうるであろうか。このことは義務教育の段階の新制中学校の生徒についてすらいいうる。

周知のようにアメリカを例外とすれば、英、独、仏をはじめ各国とも、中等学校への進学にはそれぞれ特有な選り分けが行なわれている。その上、特に仏、独等において、進級は決して容易でなく、このためフランスのごとき逆に進学者の処遇が従来大きな教育問題となっていたのである。

ところでアメリカでも、一応一斉進学は認めても、そのコースは分岐し、決して大幅な一律的、形式的進学を許さないのである。デモクラシーの本質は、一様な上級学校進学ではなく、多様な教育の機会の確保なのである。

したがってアメリカの高等学校のコースには、知能指数80以下の生徒たちのために特設されたものすらあるわけであって、父兄、生徒共に、そうしたコースに進むことを必ずしも不名誉なこととは考えていないのである。

然るにわが国ではどうであろうか。いわゆる進学組と就職組の組分けをしただけで、本人、父兄はもとより、残念なことに教師自身すら、差別待遇を受け、あるいは与えつつあるかのごとき錯覚をもっている

者が少なくないのである。わが国における民主主義のは握は驚くべきほど形式主義にわざわざされ、すべてのものを同一の型の上級学校に進学させなければ、教育上の差別待遇を行なうこととなるといった考え方が未だに横行しているのである。

この考えは、結局、職業生活における倫理、いわゆる「職分思想」「天職観」の欠如に深々と根をおろしていると観ぜられる。もちろん江戸封建時代における「うへなみそ」「身の程を知れ」「知足安分」といった句に示された階級的な身分思想とは全く質の異なった「召命観」すなわち欧米近代職業生活の基礎に横たわる積極的な職業倫理が不足し、自己の職業に対する社会的連帯、責任感がうすいことゝ無関係ではない。われわれが欧米社会で強く印象づけられることは、どんな職業でも、誠実に事に当たり、その社会的責任を果たすことこそ終局的に幸福な生活であり、能力、適性を無視してまで、大学、高等専門学校に入学しなければ、人生の楽しみを確保し得ないといった考え方は原則として存在しない点である。

ミレーの「晩鐘」に描き出された農夫の敬虔な夕べの祈り、野良着のまま手に鋤をもって、1日の労作の終りを神に感謝する姿は、たとえそれが牧歌的であるにせよ、なおかつ欧米人の琴線にふれるのは、たゞ現代の喧噪な社会からの逃避感情ばかりではないのである。

わが国では、青年男女の離村の問題が重要な社会問題となっているが、知る人ぞ知るフランスの農村、北欧の農村にはそれぞれ固有の文化がきずかれ生活がくりひろげられているのである。デンマークの国民高等学校運動のごとき、その根底に創始者グルンドウィヒの烈々たる愛国の至情と共に敬虔なキリスト教的信仰が脈々として波うっていたことが忘らるべきでない。

六

現代世界の教育情勢は「教育的爆発」と称せられるほど、教育重視の時代である。この間にあって、「教育尊重」の国として注目されているわが国が、世界的視野の上に立って、抜本的に教育改革をおしすすめなければ、千載の禍根をのこすこと必定である。イギリスはイギリス流、ソ連、アメリカ、特にフランス等それぞれの流儀で個性味豊かな教育改革を、国民総力をあげて推進せしめつつある。この秋、この際、われわれは、上段に指摘した諸点を、その第一に根本的な反省点とし、日本国民の世界に並々ならぬ教育的エネルギーを正しく発揮せしめ、ひとりわが国だけでなく世界をよりよくしうる道に邁進すべきである。